

アメリカのリベラルアーツ大学におけるグローバルシティズンシップの探求

— 4大学の事例研究から —

Exploring Global Citizenship in American Liberal Arts Colleges: From the Case Study of Four Colleges

西村 幹子 NISHIMURA, Mikiko

● 国際基督教大学
International Christian University

Keywords リベラルアーツ大学, グローバルシティズンシップ, アメリカ, 高等教育, 国際化
liberal arts college, global citizenship, America, higher education, internationalization

ABSTRACT

本稿は、グローバル化の影響を受けて変化する高等教育において、高等教育の市民性の醸成という社会的な役割に焦点を当て、アメリカの4つのリベラルアーツ大学の先駆的な事例を分析する。具体的には、教育プログラムの中にかにグローバルなレベルの市民参加が統合されているか、またグローバルレベルの市民参加プログラムがどのようにデザインされ実施されているのかというリサーチクエスチョンを設定し、2018年2～4月に23名の教職員への半構造化インタビューおよびドキュメント調査を実施した。4大学に共通して見られる特徴としては、組織主導、教員主導、学生主導の3つの意味においてオーナーシップが共有され、多様な取り組みが行われているという点、救世主コンプレックスや文化的観光に批判的な視点を持ちながら教職員および学生のあり方を見直すような制度やプログラムが導入されている点、ローカルとグローバルの間を繋ぐ問題意識を意識的に学内に持ち込む取り組みがなされている点、大学の使命とその他の制度が連動している点が挙げられる。

This article aims at examining the social role of higher education to nurture global citizenship in the

context of accelerated globalization. The research took the case study approach to 4 liberal arts colleges in the United States for the purpose of understanding the underlining perception and institution that support the innovative cases. In concrete terms, two research questions were posed: How do the colleges integrate civic engagement at the global level into the education programs?; and how do they design and implement the programs as an institution? The author conducted the semi-structured interviews with 24 faculty and staff members in total and analyzed the documents of four colleges in February-April, 2018. The study revealed four common characteristics across the four colleges, namely, 1) a combination of institution-led, faculty-led, and student-led approaches; 2) intentional programs that attempt to avoid savior complex and cultural tourism; 3) intentional integration of common issues that link the local level with the global level into various education, research, and training programs for faculty, staff, and students, and; 4) consistency in university mission and the institutional, educational, and financial measures to enhance civic engagement at the global level. In sum, various actors are collaboratively promoting the concept of global citizenship in education, training, research, and service with shared ownership, with the different degrees and dynamics across the four colleges.

1. はじめに

グローバル化の影響を受けて、過去二十年の期間に高等教育機関の国際化には劇的な変化がうまれている。特に、グローバル化は、高等教育機関に国際性、卓越性、公正性、多様性を同時に求めるという極めて高度な要求を突き付けている（西村, 2014）。しかし、これまでの高等教育の国際化の動きは、国際競争力を意識した国境を越えたプログラムや学生の移動の評価、学位や規格の統一化といった国際戦略に関する政府や地域経済協力機関の役割等、国際性と卓越性に関する研究を多く生み出している一方で（Crosier, Purser, & Smidt, 2007; De Wit, 2011; Knight, 2008; Stier 2010; Tadaki & Tremewan, 2013）、高等教育における機会の公正性や学習者の多様性の享受といった社会的な課題に対する関与に注目した研究は少ない（Altbach, 2009; 西村, 2014）。

2015年9月に国連総会で採択された持続可能な開発目標には、教育目標として「インクルーシブで公正な質の高い教育」の機会を与えることが明記されており、中でも平和と非暴力の文化を創り出す教育、グローバルシティズンシップ教育、持続可能な開発のための教育が国の経済レベルを問わず重要な課題として打ち出された。高等教育がユニバーサル化の段階に入った我が国にとっ

て、公共的価値の醸成とそれへの具体的なコミットメントをもつ人材の育成は高等教育の大きな役割ともなっている。

他方、東アジアにおいては、拡大するリベラルアーツ教育の共通点として、市民社会に貢献する人材という側面が極めて薄いことが明らかとなっている（Jung, Nishimura, & Sasao, 2016）。同地域では、官僚エリート養成を中核とし職業的志向性が極めて強い人材育成制度体系の中で、公共的な価値意識の醸成やボランティア活動を促進することが高等教育の役割として認識されることが少ない。

本稿は、上記のような背景を受けて、日米比較研究の一環として、まずは米国において長い歴史を持ち、かつ世界の70%を有するリベラルアーツ教育（Godwin, 2013）が、その価値の中核に位置づける市民性教育をどのように捉え実践しているのかを理解することを目的とする。特に、グローバルな次元での市民性教育の捉え方の特徴を把握すること主眼とする。

2. リベラルアーツ教育と市民性

2.1 市民性の価値認識

米国においては、リベラルアーツ教育は、幅広い知識とともに倫理的、社会的、市民的な責任感と態度を育てることに焦点を当ててきた（Chopp,

2014; Clark & Jain, 2013; Ferrall, 2011; Roth, 2014)。20世紀初頭には、深い内省的思考と大きなビジョンと理想を掲げることが重んじられ、近代科学の道徳性や知的な統一性の欠如を補うことがリベラルアーツ教育の使命とされた (King, 1917; Meiklejohn, 1920)。21世紀半ばになると、より具体的に学際性の重要性が強調され、現在を知るための歴史研究や市民社会の一員としての道徳的目的意識の醸成が重んじられた (Buchler, 1954; Summerscales, 1970)。さらに、「近代科学から人間性を取り戻す」という観点から、哲学教育の重要性も強調された (Dewey, 1958; Hutchins, 1968)。

より近年では、Chopp (2014) は、リベラルアーツ教育の3つの柱を批判的思考、道徳的で市民的な人格形成、世界の改善への知的貢献と位置づけている。批判的思考は、小集団における討議や討論を重視し、学際的で幅広い文脈における研究を通して醸成されると考えられているのが特徴的である。また、道徳的で市民的な人格形成は、授業外でのコミュニティを基盤とした活動や、学生同士や教員と学生の間に関わりや寮生活を通して培われるとされる。さらに、世界への貢献としては、より国際的、多文化間に関連するさまざまな経験やサービス・ラーニング等の経験的学習を通して行動を起こすことが学生時代から奨励されている。

2.2 高等教育におけるグローバルシティズンシップ教育

グローバルシティズンシップ教育は、1990年代から2000年代にかけて加速したグローバル化を受けて提唱されるようになった。高等教育においては、留学、インターネットを通じたバーチャルな教育、カリキュラムの国際化などの学修成果の一つとしてグローバルシティズンシップに関する能力が設定されてきた (Stein, 2015)。ただし、このグローバルシティズンシップに関する能力をいかに測定するかという議論とともに、いかに効果的に学生のグローバルシティズンシップの学習にアプローチできるかについての議論は未だ教育学的な試論に留まっている (Braskamp, 2010;

Morais & Ogden, 2011; Roberts, Welch, & Al-Khanji, 2013)。Stein (2015) は、4つのグローバルシティズンシップの立場を整理し、起業家的立場、リベラルな人間主義的立場、反抑圧的立場、西洋的な既存の考え方から一線を画す立場を提唱しているが、概念的な立場と教育的実践の関連については考察できていない。従って、グローバルシティズンシップ教育は未だ理論化が十分になされていない研究・実践領域である一方で、さまざまな具体的な事例が報告されているのが実情である。本稿は、こうした学問的挑戦に面と向かって応えるものではないが、リベラルアーツ教育の事例を通して、現実に行われているグローバルシティズンシップ教育の実践の本質を理解する作業の一端を担うものである。

3. 研究の方法

本研究は、米国の西部、東部、中西部に位置する4つのリベラルアーツ大学を対象とした事例研究である。具体的には、以下の2つのリサーチクエスチョンを掲げる。

1. アメリカのリベラルアーツ大学は、教育プログラムにおいて、どのようにグローバルなレベルの市民参加を統合しているのか。
2. アメリカのリベラルアーツ大学はどのようにグローバルレベルの市民参加プログラムをデザインし実施しているのか。

グローバルシティズンシップ教育という用語はアメリカの高等教育においては一般的に使用されておらず、シティズンシップに関しては大学の周辺地域におけるローカルな市民参加 (civic engagement) あるいは地域参加 (community engagement) として実践されているのが現状である。従って、本研究においては、グローバルシティズンシップではなく、ローカルおよびグローバルレベルでの市民参加を中心的な操作概念として用いた。

対象大学の選出方法としては、カーネギー財団

が2010年および2015年に地域参加を奨励していると認定した大学リスト¹を用いた。具体的には、リストされている全米361大学の中に含まれる45(全体の12.5%)のリベラルアーツ大学のホームページを精査し、ローカルレベルとグローバルレベルの市民参加を意識的に実践している大学を7校選出した。そのうち、3校のみが「グローバルシティズンシップ」あるいは「グローバルイニシアティブ」という用語をセンター名あるいはプログラム名として有していた。7つの大学の中からこの3つの大学を含む4校を地理的なバランスやアクセス可能性を考慮し、事例として選出した。

筆者は、2019年2月～4月にかけて米国において対象4大学を訪問し、市民参加に関するプログラムを実施しているセンターや組織に関わる行政職員および当該分野を担当する教員を含む計23名に半構造化インタビューを実施した。また、プログラムやカリキュラムに係る資料収集を行い、インタビューデータとともにNvivo 10を用いて探索的オープンコーディングを中心としたテキスト分析を実施した。

4. 結果

4.1 市民参加の教育プログラムへの統合の仕方

表1は、データから抽出された市民参加に関連したクラスターとカテゴリーである。

市民参加を教育プログラムに統合する場合、その捉え方は4大学共通して、社会に何らかの変化

をもたらすことを狙いとしている。また、公共財や社会的責任を意識し、さまざまな地域社会における人間関係を構築しながら、学生と地域社会との相互的な学びを進展させるというスタイルが重視されている。こうした経験的な学習スタイルが、教員、学生、地域社会の共同研究プロジェクトやサービス・ラーニング等に活かされている。ただし、社会的な変化を狙いとしつつも、以下の発言に見られるように、焦点は学習プロセスに当たっていることに留意する必要がある。

リベラルアーツ大学では、研究大学と比べて学生の学習と発展がより重視されています。研究大学では、社会的なインパクトを研究成果として求めがちですが、私たちは教授法にこだわっています。(A大学 行政職員)

ボランティアの経験は大学に入る前に行うのが一般的です。大学の比較優位性は、政治の世界やコミュニティで起きている事柄をカリキュラムと結び付け、活動の質を改善し、社会に積極的に関与する学問(engaged scholarship)をもちこむことができるようにカリキュラムを豊かにすることです。(B大学 教員)

コミュニティとのパートナーシップがある教授法が重要です。コミュニティを基盤にした学習コースがあること、そして大学がそれを重視していることが鍵です。(D大学 行政

表1 4大学の事例に見られる市民参加の概念要素

クラスター	カテゴリー
1. 変化	世界をより良い場所にする、正の変化をもたらす、政策に影響を与える、人びとの生活に影響を与える、さまざまなレベルにおいて行動を起こす、進歩的、行動的、改善へのコミットメント、社会変化
2. 公共財	公共財のために働く、公共財をより前進させる、包摂的
3. 責任	責任ある市民、公共的な生活やセクターへの参画、社会的責任、民主的なプロセスへの参加
4. 関係	地域との関係性の構築、協働的なプロセス、地域との対話を組織的に行う関わり方、地域にお返しする、地域参加、互恵的な関係、相互性、人間関係、複雑な人間関係
5. 学習	学生の学習、学生の成長、地域への奉仕と地域からの学び
6. 説明責任	特権と資源に対して大学が説明責任を果たすためのもの

職員)

次にグローバルなレベルでの市民参加について、大学関係者の認識は表2の通りまとめることができる。市民参加と同様、社会的な変化をもたらす相互性や互惠性を意識した行動という点は共通しているが、正義、道徳、倫理といった価値や異文化間の移動を伴うことから、より複雑性に対応する能力や持続する意思が求められると考えられていることが分かる。

ここで留意すべきは、多くの関係者から、倫理的な観点が語られたことである。すなわち、いわゆる先進国の人間が途上国に行き問題を抱えた人を助ける、貧困を美化するといった、救世主コンプレックスを警戒し、文化的な観光、あるいはボランティア観光といった、自分たちの特権に無頓着かつナイーブなや課題の設定や社会的正義の欠如に対して懐疑的である点が特徴的である。異文化を跨ぐプログラムの場合は、特に自らの立ち位置(ポジショナリティ)に対して批判的になった上で、相互性、互惠性を築くという点が重要であるとの認識が見られる。

以下の比喻からは、そのプロセスが複雑で時に痛みを伴うことを示唆している。

グローバルシティズンは複雑な家族の集まりみたいなものです。そこには優しいおばさんや面倒なおじさんがいて、会いたい人もいれば、会いたくない人もいます。家族に対する責任もあるけれど、権利や特権もある。どんなに良い家族にも問題はあります。ただ、その問題を繋ぐ糸があつて、それは歴史を知り、コミットメントを持っていること。自分の家族を超えたところでもそのような関係に関わっていくことだと思います。(A 大学 行政職員)

グローバルシティズンシップは、自転車に乗るようなものです。世界に出て行くには学ばないといけない本質的なスキルで、その学びの過程は必ず痛みを伴います。途中で転ぶこともあるでしょう。けれど、一度、乗りこなせるようになれば、絶対に忘れることはありません。世界中の異なる背景を持った人びとと意図的に関わりをもち、共通する関心事に対して深く思慮深い自省(リフレクション)することによって培われるものだと思います。(A 大学 行政職員)

また、グローバルシティズンシップという概念

表2 4 大学に見られるグローバルシティズンシップの捉え方における概念要素

クラスター	カテゴリー	注(比喻等)
1. 価値	倫理的、公正性、同情、公正な扱い、正義、包摂的、道徳、気づき	
2. 態度	情熱的、応答的、機会として捉える、批判的に考える、多様な責任感	救世主コンプレックスの正反対
3. 絶え間ない学習	目を見開く、さまざまな方法を絶え間なく探す、理解しようとする	自転車に乗るようなもの(学習過程では痛みを伴うが、一度乗れるとずっと乗りこなせる)
4. 行動	選択、参加、お返し、正の変化を起こす、多くの道、改善すること、さまざまな役割を果たすこと	
5. 文化的移動	文化システムを跨ぐ、一つの文脈から別の文脈に移動する、コード切り替え、異なる観点、境界線を越える	文化的観光、ボランティア観光の正反対
6. 相互接続	相互依存的、相互性、互惠性、地域社会を豊かにする、地域の観点	
7. 複雑	複雑なもの、自分で見つけ出すもの	複雑な家族のようなもの
8. 最小限の期待	制度的、社会的願望、プロモーション用語	
9. 存在しないもの	信じていない、余り考えたことがない	

に関しては教職員の間で懐疑的に捉える視点も見られた。制度的、社会的な願望ではあっても現実的に存在するものではないという観点や、大学の国際化をアピールするための組織的なプロモーション用語でしかないという認識は、教授陣の力が強いとされる大学(B大学)でより如実であった。

ローカルとグローバルなレベルの関連性については、意識的にその繋がりをもって教育プログラムに統合することが目指されている。共通の課題が世界のさまざまなところでどのように起きているのか、ある問題がどのように繋がっているのか、を明確に意識したプログラム作りが目指されており、単発の異文化体験、サービス経験とは一線を画している。また、こうした関連性を持たせるために不可欠なのは、組織としての学際性の深化と対話の拡がりである。異なる分野の教員間の対話、学生や地域に対する教員自身の市民参加情報の公開システム等を通じて、融合的で自発的な取り組みを生み出す環境と教職員と学生が自らのバイアスに気付きやすいオープンな学習環境を形成することに対する努力が意識的になされている。

4.2 市民参加のプログラムデザインと実施方法

どの大学にもカラーがあるように、4つの大学にもそれぞれ特徴が見られた。図1に見られるように、データに頻発する用語は大学間でかなり異なっており、それぞれ、A大学はグローバルシティズンシップ教育に対する大学の組織的なイニシアティブがある大学、B大学は教員主導の市民

参加に関するイニシアティブが主要である大学、C大学は学生主導のイニシアティブが主要である大学、D大学はローカルとグローバルなレベルでそれぞれ大学の組織的なイニシアティブがある大学、という特徴があった。ただし、プログラムの内容を分析すると、全ての大学において組織主導、教員主導、学生主導のプログラムや制度が整っており、その内容も創造的で多様である。このように、オーナーシップが共有され、実施されている構図を見ることができる。

表4に示すとおり、組織主導の取り組みとしては、市民参加に関する賞や奨学金の授与が共通した実践として見られるが、国際的な取り組みに関するスタディツアーを伴うファカルティ・デベロップメント(FD)や教職員と学生を巻き込んだ国際セミナーの開催、特定の国際課題を扱う招聘教員システム、地域社会の社会経済的背景が困難な人々との交流や進学支援等、移民や難民の多い土地柄や貧富の格差等の地域性を活かした内容は多岐に亘る。教員主導の取り組みは全大学共通なものとして、地域社会と連携した研究とそこへの学生の関与、授業内でのサービス・ラーニングやサービス・リサーチ等の経験的学習の実施である。また、そのためにセンターが教員研修や事務的な支援を行っている。学生主導の取り組みに関しては、学生がローカル、グローバルな多様な地域社会において課題を見出し、提出した活動プロポーザルを審査の上、旅費や滞在費を支援するのが最も一般的である。学生のイニシアティブを奨

表3 ローカルとグローバルのレベルの市民参加の関連性の捉えられ方

クラスター	カテゴリー	注
1. 同心円	共通の／類似した課題、連続した鎖状の課題、境界線を越えた内省のプロセス、相互接続	
2. 学生の立ち位置 (ポジションナリティ)	変容、問題に関与する、個人的なつながりをもつ、文化的な感受性	ただ単にそこにおいて助ける、単なる経験、バイアス、貧困のエキゾティズム(異国情緒の指向性)との違い
3. 境界線を越えた対話	教員の市民参加に関する地図、教室内外でのグローバルとローカルの関連性の明確なガイダンス、学際的な対話	
4. 実際のな挑戦	関係性の構築、ネットワーク、自分を問題の一部と認識することの難しさ	救世主コンプレックスや文化的観光との違い

A 大学：グローバルシティズンシップ教育に対する組織的なイニシアティブ



B 大学：教員主導の市民参加イニシアティブ



C 大学：学生主導のイニシアティブ



D 大学：ローカルとグローバルなレベルでの組織的なイニシアティブ



図1 頻出語に見る各大学の特徴

表4 各大学のグローバル、ローカルレベルにおける市民参加への異なるアプローチ

	A 大学	B 大学	C 大学	D 大学
組織主導のプログラム	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 国際ラウンドテーブル ◆ FD 国際セミナーおよび国際研修ツアー ◆ 国際的・学際的な専修制度 ◆ 「グローバルシティズンシップ賞」の授与 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 「市民参加学術賞」の授与 ◆ 教員の市民参加状況マップの作成と公開 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 地域社会における市民活動とインターンシップへの奨学金の授与 ◆ 困難な社会経済的環境の地域の高校生への進学支援活動 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 地域社会における市民活動とインターンシップへの奨学金の授与 ◆ キャンパス内に居住するグローバル研究員の招聘 ◆ テレビ国際会議・セミナー
教員主導のプログラム	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 地域との研究プロジェクト ◆ 地域との経験的学習プログラム 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 地域との研究プロジェクト ◆ 地域との経験的学習プログラム 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 地域を基盤とした研究・学習プロジェクト 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 地域を基盤とした学習
学生主導のプログラム	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 学生のインターンシップの提案への財政支援 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 学生のインターンシップの提案への財政支援 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 地域へのアウトリーチ教育 ◆ 地域活動参加 ◆ ネイティブアメリカンの家庭支援 ◆ 学生の地域活動の提案と財政支援 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 学生のインターンシップの提案への財政支援

励するC大学の場合には、地域社会に教育ボランティアとして学習支援を行ったり、ネイティブアメリカンの文化継承や家庭支援を行ったり、その他の地域社会の課題に応えるプロジェクトを企画し参加したりする学生に対する財政支援を行っている。どの場合にも、学生が主体的に地域のニーズを調査し、対話し、活動を提案、実施、運営するという内容になっている。

5. 暫定的な結論と今後の研究課題

グローバルとローカルの双方に焦点を当てて市民参加を捉えているリベラルアーツ大学は実際のところ希少である。アメリカでは、大学の近隣の社会をコミュニティと捉え、そこに対してサービスを展開することが重視され、それを課外活動としてではなく、授業や研究に取り込むことが主流となっている。本研究が対象とした4校のリベラルアーツ大学は、この意味では特殊であり、グローバルな展開を目指している先駆的な事例と言ってよいだろう。これらの事例大学においては、4つの共通した特徴が見られた。

第一に、組織主導、教員主導、学生主導の3つの意味において多様な取り組みが行われているという点である。各大学において、3つの主導権の度合いが異なっているが、すべての観点において取り組みが見られ、多様なアプローチが取られている。基本的にはこれらの三本柱が重要な原動力となっているという点は共通している。

第二に、4つのリベラルアーツ大学すべてにおいて共通する認識として、グローバルレベルの市民参加については救世主コンプレックスや文化的観光に批判的である。グローバルなレベルでの市民参加を教育プログラムに取り込む場合に、これらの態度に陥らないよう、価値、態度、絶え間ない学習プロセス、立ち位置（ポジショナリティ）という観点から教職員および学生のあり方を見直すような制度やプログラムが導入されている。特に、FDやカリキュラム内外の連携においてはさまざまな取り組みがなされており、教職員、学生、地域社会という3つの柱が歯車のように連動して

動くような包括的な捉えられ方、大学の文化が特徴的である。

第三に、4つのリベラルアーツ大学においては、ローカルとグローバルの間を繋ぐ問題意識として、世界共通の課題やその相互接続を意識的に学内に持ち込む取り組みをしている。ローカルとグローバルのレベルの相互接続を可視化して授業の中に持ち込み、TV会議などの科学技術を駆使してさまざまな立場の人と対話する機会を設けたり、国際的な学者、実務家、運動家等を学内に一定期間招いて交流する等の対面的な企画をしたりすることにより、教職員および学生の意識改革や行動変容に務めている。また、その企画は、教員だけでなく、職員と学生もアイデアを出して協働しているところも特徴的である。

第四に、こうした意識的な取り組みの根底には、各大学の使命が色濃く反映されていることである。特に、リベラルアーツ大学としての市民社会や世界の改善への貢献、社会的正義の意識なくしては、組織的な取り組みを実現することは難しい。また、こうした使命に基づいた大学の文化とそれに裏付けられた教員の雇用方針および研修の実施が一貫して行われていることも重要な特徴といえる。

結論として、本研究の4大学の事例に見るグローバルシティズンシップ教育のあり方には多少の相違点は見られるものの、大きな共通点が浮かび上がった。それは、教員、職員、学生がそれぞれ主導権を発揮して市民参加の実態を生み出しているということ、そしてその背景には大学における使命に基づく強い信念と制度的、学術的、財政的な取り組みが、学内のリーダーシップおよび同窓生に支持されているということである。グローバルシティズンシップ教育に向けた大きな原動力は複数の異なるレベルのアクターによって支えられていることができる。

最後に、本稿の限界として、4校の事例はアメリカのリベラルアーツ大学における特異かつ先駆的な事例であるため、一般的な現象を反映したものではないという点に留意する必要がある。多くの大学は、近隣の地域における研究やサービス活

動を市民参加と位置づけており、地域参加の「地域」の認識をグローバルなレベルに拡大する可能性やそれを可能にする要因については、グローバルレベルに発展させていない大多数の大学を対象に、市民参加の認識をより深く研究する必要がある。また、比較的グローバルなレベルの市民参加がより強調されているアジアのリベラルアーツ大学の認識と比較することにより、リベラルアーツ教育の捉えられ方、グローバルシティズンシップの概念の多様性を各社会の文脈や背景とリンクさせて比較社会的な観点から理解することも残された研究課題である。

注

¹ カーネギー財団によると、地域参加は高等教育機関とより大きな地域社会（ローカル、リージョナル／州、ナショナル、グローバル）との間においてパートナーシップと相互性をもって互恵的な知識や資源の交換のための協働と定義される。地域参加の目的は、大学と公共と民間の両セクターの知と資源とパートナーシップによって、学術、研究、創造的活動を豊かにし、カリキュラム、教授、学習を強化し、教育を受けた参加の意思をもった市民を育成し、民主的な価値と市民的責任を強化し、重要な社会的課題を提唱し、公共財に貢献することである（Carnegies Foundation, 2019）。

引用文献

Altbach, P.G. (2009). Peripheries and centers: Research universities in developing countries. *Asia Pacific Education Review*, 10, 15-27.

Braskamp, L.A. (2010). Being effective interventionists to foster student global citizenship. *Journal of College & Character*, 11(1), 1-6.

Buchler, J. (1954). Reconstruction in the liberal arts. In D.C. Miner (Ed.), *A history of Columbia College on Morningside*, New York, NY: Columbia University Press.

Carnegies Foundation. (2019). Carnegie community engagement classification. Retrieved from <https://compact.org/initiatives/carnegie-community-engagement-classification/#Description>

Chopp, R. (2014). Remaking, renewing, reimagining the liberal arts college takes advantage of change. In R. Chopp, S. Frost, & D.H. Weiss (Eds.), *Remaking college: Innovation and the liberal arts* (pp. 13-24). Baltimore, MD: The Johns Hopkins University Press.

Clark, K., & Jain, R. (2013). *Liberal arts tradition: A philosophy of Christian classical education*. Pennsylvania, PA: Classical Academic Press.

Crosier, D., Purser, L., & Smidt, H. (2007). *Trends V: Universities shaping the European higher education area*. Brussels: European University Association.

De Wit, H. (2011). *Trends, issues, and challenges in internationalisation of higher education*. Amsterdam: Centre for Applied Research on Economics & Management of the Hogeschool van Amsterdam.

Dewey, J. (1958). *Experience and nature*. New York, NY: Dover.

Ferrall, V.E. (2011). *Liberal arts at the brink*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Godwin, K.A. (2013). *The global emergence of liberal education: A comparative and exploratory study*. Boston, MA: Boston College.

Hutchins, R.M. (1968). *The higher learning in America*. New Haven, CT: Yale University Press.

Jung, I., Nishimura, M., & Sasao, T. (Eds.), (2016). *Liberal arts education and colleges in East Asia: Possibilities and challenges in the global age*. Singapore: Springer.

King, H.C. (1917). What the college stands for. *Association of American Colleges Bulletin*, III(1), 24.

Knight, J. (2008). *Higher education in turmoil: the changing world of internationalization*. Rotterdam, Netherlands: Sense Publishers.

Meiklejohn, A. (1920). *The liberal college*. Boston, MA: Marshall Jones.

Morais, D.B. and Ogden, A.C. (2011). Initial development and validation of the global citizenship scale. *Journal of Studies in International Education*, 15(5), 445-466.

西村幹子 (2014). グローバル化と高等教育の実践的課題－入試改革への示唆 教育研究, 56, 1-11.

Roberts, D.C., Welch, L., and Al-Khanji, K. (2013). Preparing global citizens. *Journal of College & Character*, 14(1), 85-92.

Roth, M.S. (2014). *Beyond the university: Why liberal education matters*. New Haven, CT: Yale University Press.

Stein, S. (2015). Mapping Global Citizenship. *Journal of College & Character*, 16(4), 242-252.

Stier, J. (2010). International education: Trends, ideologies and alternative pedagogical approaches. *Globalisation, Societies and Education*, 8(3), 339-349.

Summerscales, W. (1970). *Affirmation and dissent*. New York, NY: Teachers College Press.

Tadaki, M., & Tremewan, C. (2013). Reimagining internationalization in higher education: International consortia as a transformative space? *Studies in Higher Education*, 38(3), 367-387.